

藤原頼長の経学と「君子」観

——『台記』を中心として——

柳 川 響

一 はじめに

藤原頼長は藤氏摂関家の嫡流にあり、若くして大臣に昇って活躍する傍ら、和漢の典籍を蒐集し、特に経書を熱心に学んだ。頼長は保元の乱で横死したことで著名であるが、彼の日記『台記』は貴族日記の中でもとりわけ異彩を放つ。それは、日々の政務を中心とした簡素な文章の列記にとどまる他の日記に比して、個人的な感情や嗜好、学問、巷説など様々な話題が豊かな筆致で綴られているからである。殊に学問に関しては、自らの学習方法を克明に記したり、定期的に学習講論を行ったりするなど、漢籍に対する記事の多さは他に類を見ない。また、経書を中心とする、漢籍に基づく語句や故事の引用も少なくなく、頼長の学識の高さが窺える。

これまで、『台記』における頼長像については大きく二つの側面から研究が進められてきたようである。一つは、『台記』で赤裸に語られる頼長の性行を中心に、もう一つは、希代の蔵書家と

して経史国書の勉強に心血を注いだ頼長の学問的な側面からの研究である。前者は、東野治之氏や五味文彦氏⁽¹⁾、神田龍身氏⁽²⁾などの研究があり、男色という観点から院政期社会や頼長像について活発な議論がなされてきた。後者については、小島小五郎氏や橋本義彦氏⁽³⁾などの『台記』全体を包括的に論じた研究があり、漢籍の受容についても少なからず論じられてきた。しかしながら、こうした漢籍の受容やそこから浮かび上がる頼長像が混迷を極める変革期にいかなる意味を持ち、他の作品にどのようなように関わっているかなど、まだまだ課題が多く残されている。

本稿では、『台記』の中で象徴的に使われている「君子」という言葉に注目し、これが『台記』においていかなる意味を持ち、また、そうした言葉に表れる人物像がいかに評価され、文学作品に享受されてきたかを明らかにしたい。頼長は「君子」という言葉を意識的に用いているが、これは他の貴族日記には殆ど見られない表現である。この特殊な言葉が使われる文脈を検証し、他の作品における頼長像と比較することで、経学に没頭した頼長の人

物像と『台記』という作品に迫りたい。以下では、『台記』における経書受容の諸相を明らかにし、その上で、「君子」という言葉を手掛かりに考察する。

二 頼長の経学偏重

現存する『台記』は保延二年（一一三六）から久寿二年（一一五五）までの二十年間であり、記事には断続が見られる。特に保延・永治年間では欠落が多いが、康治二年（一一四三）九月三十日条には頼長がこれまで学んだ漢籍「一千三十卷」の書目を挙げており、早い時期での学習について知ることができる。

すなわち、保延二年の「蒙求三卷」に始まり、同三年には「論語十卷」「史記五十一卷」「燕丹子三卷」、同四年に「漢書九十二卷」「漢書叙例一卷」を学んだ後、同五年には「古文孝経」「西京雜記」「列仙伝」など十二部二十五卷、同六年には「尚書」「毛詩」「後漢書」「李善注文選」など二十部二百九十二卷、永治元年（一一四一）には三礼（「礼記」「儀礼」「周礼」）や春秋三伝（「春秋左氏伝」「春秋公羊伝」「春秋穀梁伝」）など二十二部二百五十三卷、康治元年には「尚書正義」「毛詩正義」「論語皇侃疏」など八部二百三十一卷、康治二年は九月までに「左伝正義」など三部六十三卷を学習している。特に保延六年以降は多種多様な漢籍を学ぶようになり、次第に経書を学ぶ機会が増えている。同日条には「自今而後、十二月晦日に一年に学ぶ所を録し、曆の奥に統載すべし」とあり、康治二年から久安四年（一一四八）までの間、頼長はその年に学んだ書目を年末に載せている。

書目の列挙からも分かるように、頼長の学問的意識が特に高まったのは康治年間前後と考えられる。また、康治元年以降の『台記』には頼長の学習の様子が具体的に記されている。例えば、康治二年九月二十九日条に『御覧』を軍中で誦んじようとし、同年十一月十七日条に『南史』の要書を生徒に語らせて覚えようとしたことなどが好例である。

さらに、経書を重視するようになったのもこの時期であった。例えば、康治元年二月二十八日条では舟中で『孝経』を十五回、同年三月三日条では一切経が延引した際に「曲礼」を十回繰り返し読んだことが記されているほか、康治二年七月十三日条では、『春秋左氏伝』の学習方法を詳細に記している。ここでは、『左伝』の本文を校訂し、見出し注記を付け、要文を抄出し、春秋三伝をそれぞれ対照するなど、精読の様子が窺える。頼長はその後『左伝』を繰り返し読み（仁平四年四月十一日条）、学習講論をしている（久寿二年四月二十四日条）。また、前々月にできなかった講論を補う形で『穀梁伝』の講論を行っており（久寿二年十月二十六日条）、亡くなる前まで継続して『春秋』を学んでいた。

小島小五郎氏は「平安時代の春秋学は、伝としては左伝に限られ、その注も正義に止まるといふのがその大勢であつた」とし、「彼の経学尊重は特筆に値し、当時に於て異とするに足りる」と評価する。藤氏撰関家の人間であるにも拘らず、『公羊伝』と『穀梁伝』を含む春秋三伝を学習したことは、頼長がいかに学問上も特異な人物であつたかを端的に示している。要文の抄出、見出し注記、論議による学習方法は三礼の学習にも共通するが、さらに、

頼長は「檀弓」上下、「学記」、「中庸」が殊勝の巻であるため、重視すべきことを記している（⁽⁸⁾康治二年九月十二日条）。こうした経書の緻密な学習が、頼長の高い学識の背景となっていたのである。

次の例は博学多才なことで知られる藤原通憲に関わる話題である。

①『台記』天養二年（一一四五）六月七日条

ト与筮何前何後、与通憲入道相論、「通憲云、先ト、余云、先筮」乍臥病席有此論、余以礼記正義第五示通憲、对云、如此文者先筮、但可先ト之由、見左伝杜預注意、余又左伝本経「第五」正義「第十」示通憲云、杜注不言ト筮前後、如正義者、正法可先筮之由所見也、通憲对云、小僧之誤也、罪不知所謝、又曰、閣下才不恥千古、訪于漢朝、又少比類、既超我朝中古先達、其才過于我国、深所危懼也、自今後、莫学経典矣、余不对、心為榮、

①はト法と筮法のどちらが先かということを通憲と議論して勝ち、内心誇りに思う場面である。通憲は頼長を「その学識は漢朝でも並ぶ者が少なく、本朝の中古先達を超える」と高く評価する一方で、我が国の政治家としてこれ以上学問を続けることへの批判を滲ませる。これは撰閲家たる頼長が学問に没頭するあまり、理屈に偏重することへの強い警告とも言える。この逸話は『続古事談』巻二一・一六（五二）や流布本系『保元物語』巻下、『鑑養鈔』卷三一・五〇、『塵添鑑養鈔』卷五・一五十一「宇治殿与信西入道相論事」にも引かれるが、これらはすべて頼長の比類なき才智と悲劇

的な末路をより積極的に結び付けて解釈している。例えば、『続古事談』は傍線部に相当する通憲の言葉を「今は、御才智、すでに朝にあまらせ給にけり。御学問候べからず。若猶せさせ給はば、一定、御身のたゝりとなるべし」と記し、頼長に起こる災禍を暗示するが如くである。後世における評価が、頼長の学問に対する執着を、政治的な危うさに読み替えていることは看過できない。

三 『台記』における経書の受容

康治から久安にかけては、頼長の勉学に関する記事が特に多いが、康治二年七月二十二日には「左伝」の講論を始め、以後、学者たちを集めて学習講論を継続的に行っている。講論では、『左伝』『公羊伝』『穀梁伝』『礼記』『周礼』『儀礼』『尚書』『周易』『論語』『老子』『孝経』『毛詩』を扱っており、明経道を重視していたことは明白である。頼長は「五経正義」を学び、講論を通じて経書理解を深めたが、こうした経学の成果は経書の引用という形で『台記』の記述の中に表れている。

『台記』には経書に由来する言葉が数多くあり、そして、経書の引用は大きく二つの手段で用いられている。一つは他者への評価に伴う引用であり、もう一つは判断の根拠としての引用である。前者は、他人の言動や状態に対する賛辞や批判に際して経書の語句を用いる場合であり、しばしば感情的な評価として表れている。これに対して後者は、日常的・政治的事柄に対して取るべき行動の根拠として経書を引く場合であり、謂わば頼長が行動規範と見做しているものである。引用に際して典拠を明記すること

も注意が必要である。

まずは、他者への評価に関わる経書の引用について検証したい。

②『台記』 永治二年（一一四二）二月九日条

夜前、高松中納言実衡薨、「四十三、」雖不明経史、長糸竹、可惜々々、不可謂素殯、

▼「坎坎伐輻兮、眞之河之湄兮、河水清且淪漪、不稼不穡、胡取禾三百困兮、不狩不獵、胡瞻爾庭有稂莠兮、彼君子兮、不素殯兮」（毛詩『魏風・伐檀』）

②は亡くなった藤原実衡の人柄について、「経史に明らかならずと雖も、糸竹に長ず、惜しむべし惜しむべし、素殯と謂ふべからず」として、『毛詩』の言葉を使って評価している。すなわち、経史には暗かった実衡ではあるが、糸竹に長じ、無為徒食（素殯）の輩ではなかったとその死を惜しんでいるのである。

次の二例は辛辣な批判に伴う引用である。

③『台記』 天養二年（一一四五）九月十九日条

或人云、待賢門院崩後、大納言実行卿、数日不着服、法皇仰云、実能卿着之、実行蓋乎、可謂不忠之臣焉、聞者告之実行、俄而着之、蠶則績、而蟹有匡、范則冠、而蟬有綏、兄則死、而子臯為之衰、「在檀弓下、」此謂也、于嗟悲哉、為朝之重臣、不免不恐失礼之譏矣

▼「成人有其兄死而不為衰者、聞子臯將為成宰、遂為衰、成人曰、蠶則績而蟹有匡、范則冠而蟬有綏、兄則死而子臯為之衰」

（『礼記』檀弓下）

④『台記』 久安三年（一一四七）正月十八日条

伝聞、右大将藤原卿「実能、」称疾不参赌弓、夜中参入、定春日行幸事、若疾病者、可辞行幸行事、若扶疾、可行行幸事者、必可参赌弓、称疾不参赌弓、貪一階、不改日参内、定行幸事、顧私忘公無忠無礼、於臣道不可然、詩不云乎、相鼠有体、人而无礼、此之謂乎、

▼「相鼠有体、人而无礼、人而无礼、胡不遄死」（毛詩『鄘風・相鼠』）

③では『礼記』檀弓下を引用する。「蠶は則ち績きて、蟹には匡有り、范には則ち冠ありて、蟬には綏有り、兄則ち死して、子臯之が衰を為る」とは、礼儀に厳格な子臯を恐れて兄の喪に服した成の男を非難した表現である。ここでは、鳥羽法皇の「不忠の臣と謂ふべし」という言葉を伝え聞き、直ちに妹の待賢門院の喪に服した藤原実行をこの成の男と重ねている。つまり、実行が漸く喪に服したのは、鳥羽法皇がその喪服を着せたようなものであると皮肉を込めて非難している。また、④は藤原実能が武官の長であるにも拘らず、病と称して赌弓に來ず、その夜に春日行幸の事を決めるために参内したことについて、「詩に云はざるか、『鼠を相るに体有り、人にして礼無し』と、此れ之を謂ふか」と、『毛詩』の「相鼠」を引用して指弾する。これは礼の無いことを誇る詩で、「鼠ですら体はあるのに、人間のくせに礼がない、人間なのに礼が無ければ、すぐに死んだほうがまし」という意を踏まえる。春日社が藤氏の氏神であることを考えれば、実能の行動は無理からぬところであるが、頼長の倫理からすれば賭弓という公事

を差し置いて春日行幸という私事を優先したことになる。実能は白河・鳥羽・崇徳の外戚に連なると共に、頼長正妻の実父でもあるが、かなり強烈に批判している。小島小五郎氏も指摘するように、『本朝世紀』同日条は「次右大将実能卿覽射手奏」とあり、実際のところ実能は賭弓に参じていたようである。頼長の早合点による不当な非難と言わざるをえないが、いずれの例も礼に強いこだわりを持つ頼長の激情的で峻烈な性格がよく表れている。

このように、経書の語句はしばしば人物評に関連して引用される。すなわち、典拠となる経書の文脈を併せて読むことで、より重みのある言葉として理解することができる。謂わば、経書によつて言葉の権威付けが行われているのである。

次に、日常的・政治的根拠となる引用について二例挙げる。

⑤『台記』康治元年（一一四二）十二月二十日条

先前金吾入道基俊今年正月卒、子息等、忌年始、今月二十四日欲行法事、余云、未聞諸、親喪以正月行之、孫孝能「父能仲早卒、以嫡孫撰喪事云々」、曰、喪事不改日、余作色疾言曰、春秋不云乎、定十五年秋九月丁巳、葬我君定公、雨不克葬、戊午日下晨、乃克葬、如之者、盍改乎、孝能免冠謝、

▼「丁巳、葬我君定公、雨不克葬、戊午日下晨、乃克葬」〔左伝〕定公十五年、「葬定公、雨不克襄事、礼也」〔左伝〕定公十五年伝

⑥『台記』久安二年（一一四六）四月十四日条

頼業疾疫、今日当七日、其疾病使修理大允敦任問之曰、天未喪此文、疫神其如汝何、敦任諫曰、問疫疾者俗人之所忌也、

何以問之乎、又縦雖問之、扱吉日後問之、対曰頼業有才、無所忌、不可過今日、敦任則向彼家問之、归来云、疾甚不能言矣、頼業遂不死、

▼「子畏於匡、曰、文王既没、文不在茲乎、天之將喪斯文也、後死者不得与於斯文也、天之未喪斯文也、匡人其如予何」〔論語〕子罕

⑤では藤原孝能が一周忌の法事を年内に繰り上げて行うことを、頼長は即座に「春秋に云はざるか、『定十五年秋九月丁巳、我が君定公を葬る、雨ふりて葬ること克はず、戊午の日の下晨に、乃ち克く葬る』と、之の如きは、盍ぞ改めざるや」と叱責している。すなわち、雨が降つて定公の葬儀を延期した『春秋』の例を挙げ、孝能が予定を前倒しにして法事を行うことの非礼を責めたのである。頼長の葬礼に対する考え方の根拠が経書にあることは見逃せない。また、⑥は藤原敦任を使いとして、病気の清原頼業を見舞う場面である。見舞いの言葉として託した「天の未だ此の文を喪はさず、疫神其れ汝を如何せん」は、『論語』子罕の「天の未だ斯の文を喪さざるや、匡人其れ予を如何せん」に依るものである。ここでは、「匡人」を「疫神」、「我」を「汝」と『論語』の言葉を少し変えて使っている。頼長は「文王の作った文明の伝統が減びないのは天の神の守護があるからで、天の加護がある頼業を疫神ごときがどうすることができようか」と孔子の言葉を借りて、病床の頼業を励ましたのである。

さらに、頼長の経書に基づく判断は実際の政治にまで及んでいる。例えば、祇園臨時祭で平清盛の郎等と祇園神人が争つた感神

院闘乱事件の僉議では、頼長は「春秋の義」に依って忠盛・清盛と神人の両者の有罪を断固として主張している（久安三年六月三十日条）。また、鳥羽法皇の皇女である姝子内親王が内親王宣下を受けて「寿子」と命名された際には、「寿は衛宣公の子、殺に遇ふ者の名なり、「桓十六年の左伝に見ゆ、「其の忌み無きに非ずして如何」と問い、「寿」の字を用いることを否定している（久寿元年八月十八日条）。両者とも『春秋』の事例を一種の先例として政治に活用している。

このように、頼長は公私に亘る物事の判断規準として、経書の事例に根拠を求めている。これらもまた他者への評語と同様に、経書による権威付けを行った例と言えよう。ここに、経学偏重の、頼長独特の典故主義を確認することができる。

頼長はしばしば自身の考えや言葉の根拠として経書の事例を挙げるが、これらの例は本朝の有職故実と同様に、模範とすべき先例として提えているようである。貴族日記で本朝の先例を記す時には、典故が何か、誰の言説か、また、いつの例であるかなど、根拠となる事例の由来を示すことが通例である。『台記』で典故を明示して経書を引用する方法は、こうした本朝の故実を引く例と軌を一にする。

当時、朝廷においては年中行事の執行が政治の中心であり、先例となる故実・典礼を知ることが、儀式や政務に関して発言権を持つためにも、貴族にとって重要であった。しかし、改元や命名などの特殊な場合を除き、多くは本朝の故実に拠って政治がなされたと言える。撰関家に生まれ大臣に昇りながら、経書の事例を積

極的に活用した頼長は特異な存在であった。ここに典故主義とも言うべき頼長の思想的特質を見ることが出来る。

四 『台記』における「君子」

頼長の典故癖の中でも、とりわけ特徴的なのが、「君子」なる語の用法である。『台記』によれば、この語は康治・久安年間の記事に集中して使われている。この期間は、先に示したように頼長が学問に熱心に打ち込んでいた時期と重なる。すなわち、この「君子」という言葉は頼長の勉学と少なからず関わりを持っている。そして、頼長が「君子」たることを志向していることは、次の記事から理解される。

⑦ 『台記』康治三年（一一四四）正月十四日条

秉燭、車宿放火、人消、有暴火之紙、実長曰、以此事、給衛道人、可令顕者、対曰、詛人求消我災、非君子之道、

ここでは、車宿りの放火について、火を付けた形跡のある紙を術道の人に渡すべきという実長の意見を、「人を詛ひ我が災を消すを求むるは、君子の道に非ず」と悠然と退けている。頼長が「君子」を徳行の備わった人格者として提えていることが分かる。

こうした「君子」の最も早い用例は次の⑧の記事である。¹⁰⁾

⑧ 『台記』康治元年（一一四二）九月九日条

此亭修造「依女御代也」間、渡仲範六条邸、癰瘍付巴豆漆木、自漆木出汁付之、余召諸臣問曰、未知漆可否也、先令仲資試矣、諸臣皆曰、善也、秀才成佐進諫曰、志有之、損人安己之、君子不為諸、是君之所知也、疾雖瘳之、惡名必遺代、豈可謂

善乎、余即取漆塗之、君子曰、以諫止君過矣、忠直兩備、藤丞相過無憚改、詩曰、如切如磋、如琢如磨、其藤丞相之謂乎、

▼「子曰、君子、不重則不威、學則不固、主忠信、無友不如己者、過則勿憚改」(『論語』學而)

▼「子貢曰、貧而無諂、富而無驕何如、子曰、可也、未若貧而樂、富而好礼者也、子貢曰、詩云、如切如磋、如琢如磨、其斯之謂与、子曰、賜也始可与言詩已矣、告諸往而知來者」(『論語』學而)

▼「瞻彼淇奥、綠竹猗猗、有匪君子、如切如磋、如琢如磨、瑟兮僂兮、赫兮咺兮、有匪君子、終不可諼兮」(『毛詩』衛風・淇奥)

この記事は従来『毛詩』の引用と捉えられてきたが、「其れ藤丞相を之れ謂ふか」という言葉からも、「詩に曰く」以下は『論語』学而の言葉を少し変えて引用したものと考えられる。過ちがあれば面目などを気にせず、速やかに改める頼長の行動を、磨きの上にも磨きをかける「切磋琢磨」という言葉で讃える。また、「藤丞相過ちて改むるに憚ること無し」という言葉も『論語』に基づく表現であり、『論語』を立て続けに引用している。

注目すべきは、『論語』を踏まえた「君子曰く」以下が頼長の発言として記されているらしいことである。「藤丞相」とは微官の成佐のことと思えず、当然内大臣の頼長を指すが、「君」たる頼長が過ちを直ちに改めたことを『毛詩』の切磋琢磨の故事を引いて称賛している。成佐の発言からも分かるように、この場で「君子」たりうる存在は頼長ただ一人である。それゆえ、「君子曰

く」以下は、自らを「君子」とした上で、かつ自賛の意味を含めた頼長の言葉と受け取ることができる。

松本昭彦氏は「君子曰」という言葉を初めに置いて、『詩経』『書経』等の経書の文言を引用しながら出来事について批評するのは、『春秋左氏伝』の方法なのである」と『左伝』の記述方法との類似性を指摘する^⑨。例えば、次の事例はこうした方法の好例である。

⑨『台記』天養元年(一一四四)四月二十六日条

親隆来語曰、太后葬雜事、明日可被定云々、法皇自明日可令触穢給、忽依有養母之義、可有五月御服、(衣色、同喪父母、)喪、礼、偏法皇所令沙汰給也、君子曰、明王以孝治天下、此之謂也、昔喪白川太上法皇、哀容過于礼、今喪太后、又不失節矣、孝道之美、豈有所加哉、

▼「子曰、昔者、明王之以孝治天下也」(『孝経』孝治)

頼長が意図的に「君子曰く」として『孝経』を引用し、鳥羽法皇を称揚していることが理解される。確かに、『左伝』には「君子曰く」として作者の言葉が記される例が多く見られ、頼長はそうした記述方法を強く意識していたと考えられる。そして、さらに踏み込んで言うならば、『左伝』には必ずしも経書に基づかない「君子曰く」という評も見られ、こうした手法もまた『台記』と同一であることが新たに指摘できる^⑩。

ところで、『台記』には「君子」の用例が散見するが、実は「君子」という言葉が『台記』以前の日記では殆ど使われていないことには注意が必要である。管見の限りでは、『御堂関白記』『後二

条師通記』『殿暦』といった撰関家の日記には用例が見られない。^⑬ 頼長の用いた「君子」という言葉は貴族日記において特異な表現であったと言える。

次は、経書とは無関係と思われる「君子」の用例を確認したい。特に、これらは「君子曰く」という形で批判が展開されており、『台記』における「君子」という言葉を考える上で重要である。

⑩『台記』康治二年（一一四三）六月三十日条

弘暎参宇治、頃之、依召参御前、自辰刻、権少僧都覚豪禱之、午刻、摂政殿参給、参御前給、禅闍仰云、今日帰洛歟、曰明明後之間、可帰洛、仰云、六月祓如何、曰今朝為之了者、有御読経等、申刻「先々時」令発給、君子曰、覚豪之登于僧都可謂寵、不可謂験矣、「寵摂政之寵也、」殿宿給宇治、予依病者帰洛、

⑪『台記』天養元年（一一四四）九月二十五日条

鳥羽競馬云々、顕親朝臣語云、摂政殿、大和沙汰之間、公文所、在殿中、未曾有事也、今春、除目下名、以源朝臣清忠、申任大和守、清忠者、摂政殿近臣也、殿下親吏務、直殿侍男共数人、檢注国内田、爰僧徒大興、請止檢注、殿下不許之曰、雖檢注、於寺僧領者、不可為国領、何請止檢注乎、僧徒猶訟之、殿下曰、至于寺僧領、止享檢使、於檢注者、所不許也、不檢注者、不可分別与僧領与他領之故、僧徒莫復訟矣、国之所出之物、皆殿下可取給云々、君子云、摂政可謂專利矣、

⑫では権少僧都覚豪に対する批判的言辭で「君子」が用いられる。覚豪の祈禱が効かなかったことを、頼長は「君子曰く、「覚

豪の僧都に登るは寵と謂ふべし、験と謂ふべからず」と、「寵は摂政の寵なり」と言う。すなわち、覚豪は験力ではなく、摂政たる忠通の寵愛によつて出世したと非難している。また、⑬では、僧徒の訴えを強権的に排除して大和国の檢注をさせた兄の忠通に対して、「君子云はく、『摂政利を専らにすと謂ふべし』と」と批判を展開する。撰関家領の保全に尽力する忠通を殆ど無理解に批判する頼長の空疎な余裕は、撰関家の人間にあるまじきものである。凡そ現実感の希薄な、実際の政治と乖離した態度は、彼の政治的資質の欠如を露呈している。⑩と⑪の「君子」以下は、頼長の言葉と受け取れるが、発言内容に典拠は見出しえない。それゆえ、頼長自身を「君子」と称し、自らの言葉で語っていると考えられる。

その他にも、「君子曰、信菩提、不可秉朝政、朝政又可廢才士」（康治二年八月四日条、「君子曰、宗能可謂忘恥焉」（久安二年十二月十九日条、「君子以為左將軍多非実焉」（久安二年十一月十四日条）、「君子以為知恥」（久安三年四月十五日条）のように、「君子」が批判を加える記述が『台記』には少なからず存在する。これらはすべて「君子」という形を借りた頼長の言葉であり、経書など特定の典拠に基づく言葉とは考え難いものである。

以上のように、他の貴族日記では殆ど見出しえない「君子」という言葉が、『台記』の中ではかなり意図的に、頼長個人の意見ないし心情を表す際に使われている。「君子」は他人の評価に関わる文脈で用いられることが多く、頼長の考えや感情を反映する主体として記される。すなわち、『左伝』の作者のように、頼長

は自らを「君子」と称して他人の批評を行っていたのである。「君子」は康治・久安年間に集中して使われており、勉学に特に熱心に打ち込んだ時期と重なる。したがって、君子たらしとする頼長の人物像は経学の影響を多分に受けて形成されたと考えられる。日記において「君子」が特異な言葉であることを踏まえると、「君子」は「台記」という作品の際立った特色を成していると言える。

五 諸書の頼長像と「君子」

このように「君子」を自称した頼長はどのような人物として理解されたのであろうか。最後に、頼長の人物像について整理した上で、「君子」について若干の考察を加えたい。

例えば、頼長の甥に当たる慈円が記した歴史書『愚管抄』第四には、頼長を「日本第一大学生、和漢ノオニトミテ、ハラアシクヨロヅニキハドキナリケル」人物として、その高い学才を評価する一方で、怒りっぽく万事につけて極端な性格を指摘する。こうした頼長に関する最も有名な事件は、院の近臣である藤原家成邸への乱入事件である。『本朝世紀』仁平元年（一一五二）九月八日条は、頼長が皇后宮の御所から土御門亭に帰る時、家成の門前で鬨乱を起こし、頼長の陪従が家成邸に乱入した事を記し、「衆口噉々、筆端記し難し」と当時の非難の様子を記している。『平家物語』殿下乗合で、摂政藤原基房の行列に出くわした平資盛の一行が下馬の礼をせず、馬から引き落とされた事件を思わせるが、これと比べても過激な反応ではある。この事件に関して『愚管抄』第四は、家成の下人が高足駄を履いていたことを無礼とし

て追捕したとするが、慈円が「身ヲウシナフホドノ悪事」と評したように、常軌を逸した過激な対応であったと言わざるをえない。

また、頼長の死後、比較的早く成立した歴史物語『今鏡』第五「飾太刀」では、「身の御才も広き人になむきこえ給ひし」とし、源師頼に漢書を習ったことや因明を学んだことに触れ、頼長の高い学識を評価する。しかし、その一方で、「飾太刀」には「公私につけて、何事もいみじくきびしき人にぞおはせし」として、道で出会った人が恥辱を被ったことや、障りがあると言って出仕しない人の家を焼いたり壊したりしたと記し、実際に済円僧都が病氣によって出仕しなかった際に京の宿坊が壊された話を載せている。

頼長の人物については軍記物語『保元物語』上にも言及されている。頼長の優れた才学は「和漢ノ礼儀ヲ調へ、自他記録ニクラカラズ。文才世ニ勝レ、諸道ニ浅深ヲ探ル」とし、その性格については「我身ハ宗ト全経ヲマナビ、仁儀礼智信ヲタシクシ、賞罰勲功ヲ分給フ。政務キリトヲシニシテ、万人ノ紕繆ヲ正サル」と信賞必罰で厳正なさまを記す。

諸書はその資料的性質からすべて同列に論ずることは難しいが、どの資料も頼長の高い学問的才能と峻烈な人柄を挙げていることは看過できない。そして、『愚管抄』や『今鏡』に記されるように、頼長の苛烈な性格は時として度を過ぎた所行として表れ、時人に畏れられ、非難を浴びることもあった。

こうした頼長の極端な行動は『台記』にも存在する。例えば、

頼長は出納松丘を斬った政所の舍人信里を檢非違使の兼成に引き渡した後、密かに信里の右手を斬らせており、その際、頼長は「罪重きの故なり」と理由を述べている（天養元年十一月二十九日条）。また、忠義を以て君に仕えた召使の国貞を殺した庁の下部が非常の恩赦で放免された後、何者かに殺されたことについて、「天の然らしむるか、太政官の大慶なり」とし、さらに国貞の子の召使の仕業という噂に言及した上で、自らが秦公春に命じて暗殺させたことを記している（久安元年十二月十七日条）。これについて頼長は、「天之を誅す、猶ほ武王の紂を誅するがごときなり」と、周の武王が殷の紂王を誅したと同様に、天が庁の下部を誅したと、自らの行為を天と重ねて私刑を正当化したのである。頼長は経学を通じて「礼」や「理」、「正道」といった価値観を摂取し、自らの行動規範としていたが、それらは時として独善的な側面を持つていたのである。このような自分が正しいと言って憚らない、驕りにも似た自尊心は、『台記』に散見する自らを「君子」と称する態度に通底する。

他方で、頼長の経書に基づく見識は父の忠実にさへ否定される一面があった。康治二年十一月十四日条では、「素より儉約を好む」頼長が晋の文公の故事を根拠に、着袴で銀器の代わりに土器を用いることを提案するが、忠実は「女は詩の葛屨を見ざるか、文公の土を受くるは古なり」と、『葛屨』（毛詩・魏風）を引いて否定している。ここでいう文公の故事は、『左伝』僖公二十三年伝に基づく。放浪中の文公一行が村人に食物を求めると、村人は土の塊を差し出すが、文公の臣狐偃は天が国を賜る瑞祥として、

額を地につけて拝受したというものである。頼長は文公が狐偃の諫めに従って土を拝受し、遂に周室を覇したことに肖り、土の器を用いることを提案したのである。しかし、忠実は貧しく吝嗇なことを風刺する「葛屨」を例に挙げ、文公の故事は大昔のことで、現代に土器を用いるのはけちなことと切り捨てたのである。頼長が根拠とする『左伝』の例は、些か牽強附会の嫌いもあるが、忠実は『毛詩』でもって真つ向から頼長を論破している。

また、久安元年八月二十六日条では、待賢門院の五七日での藤原宗輔の心喪が「礼」に適っていたので、自分も心喪の服を着たいと忠実に伺いを立てるが、「吉服を着すべし」との返事がある。頼長は「悲しきかな、父の命に従ひ、君を敬ふ礼を失ふ」と歎いている。彼の重んじた故事や礼法は、故実の權威たる忠実の前では意味を成さなかったのである。

このように、『台記』では頼長の意見が庇護者たる忠実に斥けられる場面が少なからず見られるが、頼長の考え方には、独善的な「君子」観や強引な典故主義に依るところがあった。また、既に見たように、藤原通憲や兄忠通などの現実的な物の見方とも大きな隔たりがあった。すなわち、経学を背景とした頼長の思想や知識が、現実社会では必ずしも受け入れられるものではなかったことを意味しているのである。

『中外抄』巻上・八三には、「また、日記は委しくは書くべからざるなり。人の失また書くべからず。ただ公事をうるはしく書くべきなり」とある。これは中原師元が記した、忠実の日記に対する考え方である。他人の非難を載せる『台記』は、忠実が意図し

た日記から大きく逸脱しており、ここにも頼長の現実との感覚のずれが表れていると言える。

以上のように、従来の日記を逸脱した『台記』と彼の強烈な個性は、経学によって形成されたが、その思想の根底には現実とは乖離した大時代的な典故主義があった。頼長は経書の知識と思想を受容し、孔子を理想とする政治を志し、現実の政治で実践しようとしていた。しかし、公私に厳正であろうとする姿勢は、一方で、自らを盲目的に正しいと信じる独善的な側面を有し、時として行き過ぎた肅清行動として表れたのである。また、経書に偏重する頼長の政治理念は、一面では、政治的实力者たる忠実や忠通、通憲などから否定されうる、謂わば時代錯誤の妄言であった。『台記』から浮かび上がる頼長像は『今鏡』や『愚管抄』などとも重なり、その人物的特質は「君子」という言葉にも象徴される。「君子」は『台記』を読み解く上での重要語の一つであり、経学に傾斜した頼長の思想的基軸でもあったと言える。

*引用した本文は、『台記』は増補史料大成・史料纂集、『毛詩』『礼記』『春秋左氏伝』『論語』『孝経』は十三経注疏（中華書局影印、一九七九年）、『本朝世紀』は新訂増補国史大系、『愚管抄』は日本古典文学大系、『続古事談』『保元物語』『中外抄』は新日本古典文学大系、『今鏡』は海野泰男『今鏡全釈』上（福武書店、一九八二年）に依り、傍線・傍点を付した。なお、引用文の「」は割注を表す。

(1) 東野治之「日記にみる藤原頼長の男色関係―王朝貴族のウィット・セクスアリス―」『ヒストリア』第八四号（一九七九年九月）。

(2) 五味文彦『院政期社会の研究』（山川出版社、一九八四年）、『院政期の性と政治・武力』『季刊文学』第六卷第一号（岩波書店、一九九五年一月）。

(3) 神田龍身『偽装の言説―平安朝のエクリチュール』（森話社、一九九九年）、第Ⅵ章「漢文日記の言説―男色家・藤原頼長『台記』」。

(4) 小島小五郎『公家文化の研究』（育芳社、一九四二年）。

(5) 橋本義彦『藤原頼長（人物叢書）』（吉川弘文館、一九六四年）。本文は「経家三百六十二卷」、「史家三百二十六卷」、「雑家三百四十二卷」の合計「一千三十卷」とするが、実際には史家が三百二十八卷ある。或いは一千三十二卷の誤りか。

(7) 前掲（4）

(8) 『礼記』の諸篇を独立して扱い、特別視することを小島小五郎氏は「中庸」を重視する宋儒と無関係ではないと指摘する（注4）が、和島芳男氏は頼長と宋学の関係について否定的である（『日本宋学史の研究』（吉川弘文館、一九八八年））。

(9) 前掲（4）

(10) ⑧の内容については、拙稿「貴族日記と説話―藤原成佐をめぐる二説話と『台記』―」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第五十八輯（二〇一三年二月）参照）。

(11) 松本昭彦「貴族日記の中の自画像―台記・中右記を中心に―」（『国語国文』第六十二巻第十号（七一〇号）（一九八七年十月））。

(12) 一例を挙げると、『左伝』隱公五年伝では、鄭が二公子の軍隊を燕軍の背後に伏せ、燕の軍隊を打ち破ったことについて、「君子曰く、『不虞に備へずんば、以て師すべからず』と」ただけあり、経書は引用されない。

(13) 「大日本古記録」所収の『台記』以前の貴族日記では、僅かに『小右記』に『易経』の引用で「君子」という言葉が記されているに過ぎない。

(14) 「増補史料大成」は康治二年十一月十六日。「史料纂集」により改めた。

【付記】 本稿は平成二十三年度中世文学会春季大会（二〇一一年六月五

日、於鶴見大学）における口頭発表「『台記』における漢籍の受容」を基に訂正補筆したものである。発表の席上及び発表後に御教示を賜った諸先生方に心より御礼申し上げる。

新刊紹介

中田幸司著

『平安宮廷文学と歌謡』

歌謡、あるいは『催馬楽』を受容する宮廷人の意識とは——。本書の帯に記されるこの文言が全体の主題である。

平安時代の文学にも数多く引用される『催馬楽』という歌謡は、いかなる詞章を持ち、いかなる表現・構成であるのか。そしてこの歌謡の享受者である宮廷人に、いかに受容されていたのか。そこに働く、いわば「宮廷の論理」の存在を想定・解明するのが本書である。本書は『催馬楽』の歌謡そのものを考究する第一部と、それを相対化すべく『枕草子』を論じる第二部と

で構成される。不特定多数へ向けられた歌謡『催馬楽』と、個人に閉ざされた文学『枕草子』の双方を論じることとで、「宮廷の論理」、宮廷人の受容の道筋を明らかにする。古代歌謡研究者にはもちろん、平安朝文学研究者にとっても必読の一書である。

（二〇一二年十二月 笠間書院 A5判
四五七頁 税込一四七〇〇円）

〔田原加奈子〕

松野陽一著

『東都武家雅文壇考』

本書は、近世中、後期における堂上派武家歌壇の研究書である。対象となるのは、これまで殆ど問題とされてこなかった分野である。

第一章においては歌人の系譜をたどる。特に第五代幕府歌学方北村季文の文事が多く取り扱われる。

第二、第三章はそれぞれ撰集と創作和文の資料紹介である。これによって堂上派の雅文活動や古典研究の実態が浮き彫りにされるのである。

「江戸歌壇の外延」と題される第四章は、狩野文庫の調査を進める上で、諸藩と江戸歌壇との関係の重要性に著者が気付いたことから編まれた章である。

新資料が多数翻刻、紹介された本書は、綿密な調査によって未開拓の分野を切り開いた一冊である。

（二〇一二年十月 臨川書店 A5判 五〇四頁 税込四七二五円） 〔長田和也〕